



スカウト週間

— 奉仕を通じて「ちかい」と
「おきて」を实践しよう —

標語

『より良き社会をめざして』

テーマ

『美しい日本を作ろう』

期間

昭和53年 5月1日(月)～7日(日)



春 想 三 題

浜松地区副委員長 宮沢 広士



今年は悪い風邪がはやっている。仲々熱が抜け切れない、食欲も出ない。こんな時、或る友隊の隊長がわざわざ見舞ってくれた。そして彼が持って来てくれた

梅肉エキスによって私は食欲を回復した。全く感謝した。有難かった。心のこもった見舞が人の心をうつのである。そして私はこれがスカウティングそのものではないだろうかと思った。人は口では友愛を説くが仲々実行出来ない。余り偉そうな事を言ったり知ったかぶりの行動は止めよう。誠実に己が誠をつくすことがスカウティングであると思う。

健康が何よりであると病気になる時は痛切に思う。そして多少疲労はするけれども快く働くことが出来る日々の有難さを感じるのである。永くふとんの中で暮す日が続くと腰が痛くなって来て我慢出来ない程になる。快適にすごせる日の有難さをつくづく感ずるのである。人間が幸せになる為の最大のものは健康であろう。風邪でもひいて2～3日ゆっくりする日が出来たらノンビリとTVでも見乍ら、ねてみるのも決して悪くない。アーなんて思っている、いざ寝込んでみると身体全体が熱っぽくて頭の奥の方がすっきりしない、いやな感じのものである。何をやるのもいやになる。健康こそ最大の喜びである。私は戦後ほとんど病気で寝たと云う程の経験がなかった。今回始めて10日前後にわたって病床生活を強いられた。その間の日程

はクチャクチャになってしまった。金谷町の友隊の隊長から頼まれていた講演会も全く申訳ないことになってしまった。一日前の日に彼は、わざわざ金谷から浜松へ来て何とか他の講師を見付けたので安心して下さいと言ったのである。私は彼のこの誠実さに床の中で頭の下がる思いがしたのである。

昔は財産を維持する方法として土地と株と預金に三分して保持することが好ましいことだと言われて来た。今は土地では売れば半分は税金になる。預金は目減りする。株は成長時代ならとも角、この様な時代では堅実とは云えない。これからの財産三分割法は三つのKだと言われている。その1つは今まで話して来たKENKOのKである。その次が教育(KYOIKU)のKと云うことになる。教育とは学問や知恵のことではなくて人柄であり心のことを云いたい。この文章に出て来た二人の隊長の様な人と云う意味である。第三のKは何であるかと云えばKODOMO(子供)のKである。立派な子供を育てることが最大の財産を作ることになるのではないだろうか。健康で働けば必ず利が生れる。教養を身につけ、よい人柄を作れば余慶は必ず廻って来る。こうして立派な子孫が繁栄してゆく。これらの事はスカウティングばかりではない。ライオンズクラブやロータリークラブその他多くの奉仕団体などに共通して考えられている処かと思う。

第7回

SSアドベンチャー キャンプ

3月25日より3月28日まで

於：日本連盟山中野営場

7th SSアドベンチャーキャンプ

浜松第24団SS隊長 原田 芳彦

第7回日本ジャンボリーを間近に控えて、過去6回に及ぶSSアドベンチャーの反省に基づいて行なわれた今回のアドベンチャーキャンプは、一寸ユニークな狙いを持って行なわれました。

SS隊の運営がほぼ全県下に浸透したと推察される現況で、今一度シニアスカウト達の基本姿勢を求めようというのが目的です。

この目的達成の手段として、3泊4日の期間中、実に1日半を彼等自身の手によるスカウトフォーラムに割きました。

当初予想した事ではありましたが、用意したテーマ「若者にとって未来は」と「SSは如何にして社会に貢献し得るか」という二つのテーマでは余り大きな盛り上がりは見られませんでした。

然し、彼等自身のニーズに基づいて選択されたフォーラムテーマ①中高校生の男女関係②青少年の非行について③好きな人嫌いな人、の時には熱気溢れる討議が行なわれ誠に盛会でした。

フォーラムの内容については、委員会記録係によって速記されたノートがありますが紙面の都合上割愛致します。

いずれにせよSS隊長はもとよりSSの両親、学校の先生にとってショッキングな発言も多々あり、反面、SSとしての自覚、自制心の強さも感じられ満足すべき結果に終わったと思っています。

今回は発想を新たに、長期移動キャンプを主テーマとし、膨大なスケールで実施致したく、おいおいにSSアドベンチャーキャンプの定型化を目指し度いと思っています。

(静岡連盟SS、RS専門委員会委員長)



第7回SSアドベンチャーキャンプ

浜松第18団SS隊長 福世 正志

3月25日～28日の冬期アドベンチャーキャンプに参加、昨年迄はグリーンキャンプ場で実施されてきましたが、今回は、山中野営場で200名余りのスカウトが参加した。

私は、富士大和隊の隊長として、副長の村上さんと隊員66名

で、雪の中で4日間の訓練に励んできました。フォーラム委員長を中心として、「若者にとって未来は」「SSはいかにして社会の向上に貢献するか」の二つのテーマに基づき活発な意見が続出、体験談、理想論、空想論など、有意義なスカウトフォーラムが行なわれた。又、技能を酷使してのパイオニアリング「ピラミッド、樵橋、狼煙塔、その他」が展開され、苦しさ、楽しさがミックスされたキャンプであった。

日頃よく耳にする言葉で、「原点に帰えれ、SS活動の推進」などと言われるが、質の低下は否めないことがはっきり現われていたように思える。

スカウト活動の益々の発展の為、指導者たる者、責任ある指導を、スカウトは今一層の奮気を、と、痛切に感じる。スカウト仲間よ、互いに努力しよう。



アドベンチャーキャンプ

浜松第19団SS隊 徳田 芳明

グリーンシニアの活動は、あまりやらなかったが、第6回アドベンチャーキャンプに参加したことが唯一の活動だったかもしれない。僕は、今までのボーイスカウト活動をよりたくさん生かそうと思ってこのキャンプにのぞんだ。このキャンプは、移動キャンプが中心となって行なわれた。雨の中の設営、撤営、移動が多かった。そしてとろくさいことに僕は、ポンチョを忘れてしまって、リュックはもちろん、着替、荷物は、全部ぬれてしまった。びしょぬれで長い道のりを一生懸命歩いた。雨の中の移動が一番苦しい道のりだった。何度か休もうと思ったが雨の中で休むこともできず、そしてみんながひたすら歩いている姿を見ると、とても休むことができなかった。

このキャンプでいろいろな体験をした。この体験を一生僕は忘れないだろう。そしてこの体験を人生の基礎として、スカウト精神を忘れずに、大きく羽ばたきたいと思う。

アドベンチャーキャンプに参加して

浜松第18団SS隊 下 沢 啓 司

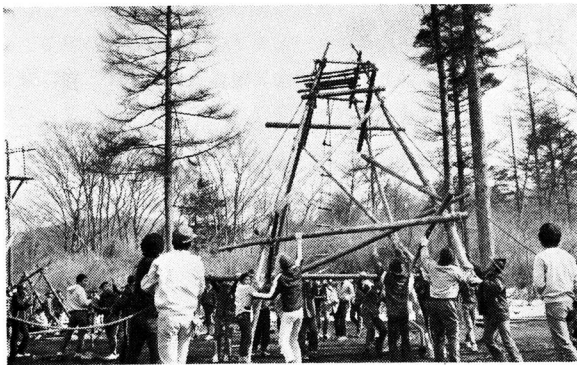
僕は3月25日～28日まで、山中野営場で行なわれたアドベンチャーキャンプにパイオニアセンサーズのハヤブサ班の班長として参加した。

初めての経験で、どんなことをやるのか、他の班員とうまくやってくれるのか、他の班との交流はどうかなどわからない点が多くて少し不安だった。しかし、一旦野営に参加すると内容は楽し、班員もうまく動いてくれたし、他の班とも友だちがすぐできて、とても楽しく過ごせた。

しかし最後の日は、朝からの雨でテントの中は雨もり、みんな水びたしになったりして苦勞も多かった。

装備や食料など、全部を自分たちで持っていったりで、いつもの隊野営とは違った訓練ができてとてもよかったと思う。

電車に乗って家路に着くとき、親しくなった他班が少しずつ減っていくのが辛くて、最後まで見送ったのが今も心に残っている。



アドベンチャーキャンプをおえて

浜松第4団SS隊 倉 見 尚 矢

このアドベンチャーキャンプは、今まで経験したことがなかったさまざまなことを経験した。

まずこのキャンプは、なんといっても寒かった。自分はいがいと寒がりであり、あまり寒い所の生活はしたことがなかった。このキャンプ地には、まだ雪が残っていたのだ。残っているといても、ここの雪は新雪で2、3日前にふったらしかった。

ここの夜は非常に早く来るのだ。なぜならば、ここは日本一高い富士山の東側にあるからだ。そんなわけで夜になると溶けかけた雪がまた氷ってしまうというぐあいだった。それだけならいいのだが、ひるま溶けかけた雪がくつにしみ込んで、それが朝おきてみるとカチカチに氷ってしまっただろうかと思ったのだ。

自分は、雪などあるとも思っていなかった。少し寒くなるだろうと予想はしていたので毛布を一枚もってきていたがシラフが3シーズンだったことや、下にひくものがなかったため、下から直接冷たさがきたこともあって少しこたえた。

この時、どこかの隊長が『備えよ常に』という言葉があるじ

やあないか、と言っていた。まさしくこの言葉、『備えよ常に』というのは、だてにあるのではなく、非常に大切なことだ、ということを実感をもってひしひしと感じた。

しかし、このキャンプは苦しいことばかりではなかった。みんなの協力によっていろんな塔を作った。それは非常に大きなものであった。自分たちで作った塔に登るということは、また格別なもので、山中湖もゆうゆう見えた。

また、最後の夜はキャンプファイヤーを囲みいろいろな話し合いをし、お互いに溶け合っていた。

このように、このキャンプでは、いろいろなことを学んだ。このことを自分のものだけにせず、ボーイスカウトなどの下のスカウトに教えていきたいと思う。



雪中キャンプ

浜松第24団SS隊 袴 田 茂 夫

今回のアドベンチャーキャンプには全く予想していなかったことがあった。もちろんそれは雪である。

正直いって雪に対するそなえなど全くしていなかったのだから、キャンプ場に多量（それほどではないが）の雪があると知った時、とても不安だった。それどころか、「こんな所でキャンプができるのだろうか…」そんな気さえた。

僕が一番心配していた事は、雪がとけて下がグチャグチャになる事である。なぜ心配したかと言うと、今回はゴム長をもって来なかったからである。くつの中が水でぬれるのは気もちのいいものではないし、体にも悪い。ただ、この心配は、あまり当たらなかった。なぜなら思ったより雪がとけなかったからである。

もう一つ予想していなかった事がある。

それは、下からの冷気だ。この事に関して、僕はねぶくろを二重にしてねむれば、だいじょうぶだと思っていたのだが、予想は、はずれた。午前2～3時ごろになると、下から冷気がひしひしと伝わってくる。おかげで夜あまりねむる事ができなかった。

今回のキャンプで苦しかった事は、この二点ぐらいである。

その他は、80～90点ぐらいの高い点をつけてもよいと思ったほど快適なキャンプだった。

つまり万全のそなえさえあれば、たとえ雪中であっても快適なキャンプは、可能なんだと思う。

第13期浜松地区班長訓練野営

昭和53年3月23日～26日 於：引佐町立渋川・川宇連野営場にて

班長訓練野営を終えて

鳥隊・隊長 玉木 功一

3泊4日の野営には、地区委員長を始め各種運営委員長ならびに委員の皆様には、私達リーダーが働きやすいように御手伝いいただきありがとうございます。私は今度の班長訓練は少し変っていたと思います。ボーイスカウト活動ではまずやらせてみて、そしてスカウトが考え自分なりの考えを入れて実行していった。今度の班長訓練は、一つのパターンを作って先に教え、次に実行した。テーマによった班長会議（訓練）～班集会～隊集会、班集会にはどんな順序で行なうかを示した。開会前～開会セルモニー、そして班長からのテーマ説明、次に作業と、それぞれについて説明をし作業をした。班集会の実際の計画書を作成し実行させその方法を示した。しかしそのやりかたの結果は各隊のリーダーの今後の指導方法によって、良かったか、悪かったかわかると思う。スカウトが班長訓練野営で習い教わった事を元に自分の考えを持っていると思う。それを自隊で実行しなければ逆効果ではないかと思う。そして訓練野営はただの野営と成るでしょう。私達リーダーは班長達といっしょになってパトロールシステムとバッチシステムをもう少し考えなおして毎月のテーマ班集会、隊集会のプロを作成し、班長が班員により良い指導力がつくようリーダーが導いて行けば今度の班長訓練は大成功です。（浜松第21団B S 隊長）



〔第13期班長訓練～観音山にて〕

班長になったら

鳥隊・ハト班 藤田 徹

もしぼくが班長になったら、なるべく指導力のある、実力のある班長になりたい。そのためにはもっともっと練習、訓練をつまなければならないと思っている。しかしぼくはなかなかのおうちやく者で、食器洗いその他はとてもおっくうに思えた。まず第一に、これをなおし、てきぱきと動けるようになり、班長の座を望むのはそれからだと思ふ。

班長になったらがんばりたいのは技能章や特修章などをふやしていききたいと思う。今まで習ってきた事をそのまま生かせ、かつ伸ばしていけたらよいのだが。

班長になったら

鳥隊・ハト班 福田 芳純

班長訓練野営はもう終わりだ。そして、4月になると班長になる。ぼくは班長になったら、積極的に行動できる班長になりたい。そして指示するだけでなく、班員といっしょになって働きたいと思う。それは、班長としての自信を大きくもつためだ。それによき班長になれると思う。ちゃんとやれば班員もまねをするし、また、班員に信頼されるようになると思うからだ。

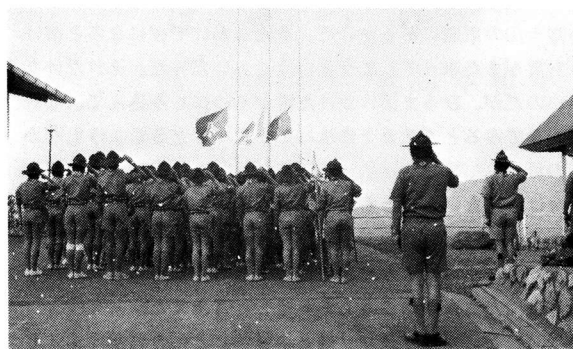
また、その他に、班員のめんどろのみれる班長になりたいと思っている。いや班長になったらこれになるよう努力しよう。この班員のめんどろをみることは大切なことだから、こんどはいつくる初級スカウトのめんどろをしっかりとみて、その他の人にも、早く進級できるように心がけてやる。このように班長になったら、よき班長といわれるよう行動したいと思う。

班長訓練野営

けもの隊・隊長 山下 二郎

3月23日から3月26日まで今年も班長訓練野営が行なわれた。けもの隊は38名が参加した。3月23日朝、和地山公園に集合し3月5日事前訓練で班編成をしていましたので、ただちに班編成し、それからバスに乗って観音山自然の家に向った。到着してからオリエンテーション、開所式をしてから、いよいよ3泊4日の班長訓練の行動が始まった。どのスカウトを見ても自信よりも不安がいっぱいの様だった。それから昼食の前に班長の任務についての講義をした。最初の日にはスカウト達は講義々々ということですが一生けんめい努力していた。二日目ハイキング、設営ということで観音山から川宇連までハイキング移動ということで途中東光院でのポイントではスカウト達もいろいろの課題に努力し行動をして川宇連についてから設営した。三日目はコンパスの使い方、地図の読み方と方位角等をしてから野営場の近くをハイキングを行なった。四日目は撤営についての講義とパーチャートについての説明をしたりしてから撤営した。それから開所式を行なった。

最後に野営長、野営行事委員長はじめ団委員の皆さん大変ありがとうございました。又、けもの隊の参加リーダー、大変ありがとうございました。



班長訓練野営について

けもの隊オオカミ班 齊藤 雅人

ぼくは、この班長訓練野営にきて大変勉強になったと思います。

観音山では、隊集会や班集会、そのほかいろいろなことを教えてもらったり、24日には15kmぐらいのハイキングでは何とか一番をとれたが、そのあと、と中で、はい句などを作ったのがあまりよくなく点がひくくなってしまった。

その日のしょくじは早くできたが、夜は大変寒く、なかなかねむれないと思っていたがハイキングでつかれたせいかすぐにねむれた。

25日の朝食、昼食、夕食でできるのがおそくて点が悪かった。この日は、ご前中、国旗の正しい上げ方下げ方、それに服制、基本動作についていろいろと教えてもらい、ひじょうに勉強になった。ごごは、ご前中と班長がかわると隊長が言ったのでぼくは、こんなときに班長をやるとは思っていなかったの、だ、いじょうぶかなあと少し不安になった。ごごはハイクがあるからだ。はじめに、リーダーから地図とシルバーコンパスについてせつめいしてもらい出ばつした。けっかは悪くざんねんだった。ハイキングでとう着がおそかったので夕食がおそくなってしまった。

ぼくは、この班長訓練野営で学んだいい所、悪い所、いろいろなことをおぼえておきたい。

班長訓練野営について

けもの隊黒ブタ班 鈴木 達己

ぼくは、この3月23日から3月26日間の班長訓練野営でいろいろなことを学び勉強しました。それはテントの設営、立ちかまどの作り方、国旗、服制、基本動作、地図とコンパスの使い方、BSの野営とは、などです。

地図とコンパスの使い方の時はよく話を聞き、しっかりと身につけようとし、自分で努力をしたりしました。

そしてハイクするとき、班で協力しなければいけないのに班をみだしおいていたりし隊長に「もし六年生で道にまよったりしたらどうする」と注意を受け、それをなおし、行動をおこない、これで班長としてハイクにつれていく自信がわきました。

また食事のときは、大きく切りすぎてしまい、うまくにえなかったジャガイモ、カレーが水っぽくスープみたくなったりして失敗してしまい、これでこの方に自信をなくしたりもしました。

このようにぼくは、この3ばく4日の班長訓練野営でいろいろなことを覚えました。これでぼくは、班長になり班員に教えることができます。そして、りっぱな班長だといわれるようになり、班もしっかりと協力して、りっぱな班長、りっぱな班をつくっていきたいと思います。

班長訓練野営に参加して

川隊・隊長 富田 扶司夫

今年もまた春風とともに、班長訓練野営の時期がきた。春とはいっても、まだ渋川の山の中の冷え込みは相当厳しいものが

あった。

今回は例年と異なり、最初に舎営を行ない、次に野営の訓練のため川宇連に移動した。スカウト達は、この野営が相当厳しい事は先輩スカウトから聞かされていたらしく、最初はかなり緊張していたようだ。しかし舎営と言う事もあって、しだいになごやかな雰囲気になり、話し合い、仲間づくりも活発化してきた。どの顔にも笑顔がいっぱいである。明日のハイキング、そして設営と苦しい訓練が待ち受けている事も知らず……。



〔第13期班長訓練～移動ハイクで川宇連へ〕

2日目ハイキングに出発、川宇連までの10キロ余の山道を元氣よく、重い荷物を背負い出発。今回のスカウトを見廻すと、例年になく小さく思える。肉体的に耐えうるか心配していたが、途中のポイントでのチェックも難なく通過、リーダーが予想した到着時間を大幅に短縮して、目的地である川宇連に到着。大人が中途半端な気持ちで同情し、訓練の内容を変更する事の偶かさを知らされた思いである。この苦しかったであろうハイキングを乗り越えた自信だろうか、設営にしろ、各訓練にしろ、はつらつと自信を持って取り組んでいる姿をみて、本当に頼もしく思ったのは、私一人ではないはずである。各団からの寄せ集めの班を編成し、何かと不安が先行したであろうが、各訓練を消化していくうちに、仲間意識がめざめ、もう何年も一緒に活動していた様な雰囲気にはおどろかされたものである。この訓練で学んだ技能、知識を、これからのスカウト活動に生かしてもらいたいと思う。良きスカウトになるために、また良き社会人となるために、この班長訓練野営の苦しみを乗り越えた自信をいつまでも忘れず、がんばってくれるものと期待します。

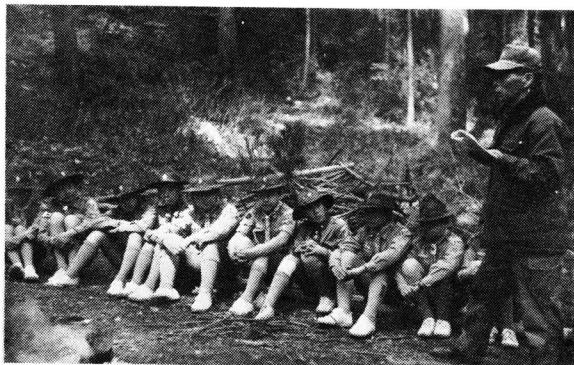
班長になったら

川隊あゆ班 寺井 義幸

ぼくは時々班長になったら、どんな事をしようかと考える時がある。ぼくが、ボーイスカウト活動に参加しはじめたのは、たしか二年前の夏の事だったと思う。その時はまだ、カブスカウトができていなくて、仮入の形で11団に入隊しました。

キャンプの時、そのころはもちろん今も、給水係をやらされます。やっている時は「いいなあ、班長や一級は」と思った時も少なくありません。

ぼくが班長になったら、初級の人に今までぼくらがやらされた給水、まき拾い、食器洗いなどをやらせるつもりです。そしてぼくは、すい事、火の番などをやり、たまに給水の手伝いをしてやるつもりです。でも初級時代のぼくを思い出し、なるべく平等に仕事をやらせるつもりです。



まず、この班長訓練野営で学びとったことや体験を生かそうと考えるだろう。

しかし、どんなことを学んだのか。これは、やはり厳しい訓練にたえてきたという自信とスカウトならだいたい仲良しになれるということだろう。

これだけで班長の役務を果せるかどうか。いやいや、まだまだだ。なぜなら、班長は指導力と豊かな技術だ。まことに恥かしいことだが、二級の結さくなどができていない。考えればまだある。だから、これらの技術を修得する必要がある。

さて、未熟ながら班長になったら、どんな班にするか。これは第一にチームワークが良い班にしたい。これは集団行動において最も大切なことの一つだと思う。第二にスカウトのおきて、ちかいなどをよくしり、自分の級の課目はすべてできるような班にしたい。これは、真のボーイスカウトになるということが大切だと思うからだ。第三にどんなときでもちかいとおきての実行をする班にしたい。これが主な理想の班だ。

班長になった時のことを具体的にまとめると、班会議、班集会を多くひらき、活動を活発にすること。野営では、常に班員の気持ちを考え、技術を教えること、常にスカウト活動などで知っていることを話してやることなどだ。今までのことをまとめて、

「班長になったら、真のスカウトは何かということをよく考え、自分の技術をすべて班員におしえ、よい班長だといわれるようにしたい、

と思う。これを、全力をつくして、がんばろうと思う。

(浜松第12団)

班長になったら

川隊UFO班 長谷 和彦

もし、ぼくが班長になったらまず1に班の人から信頼されることです。

2に班員に不正なことをやるような人をなくすことです。

3にりっぱな班にし、この力を隊にささげようと思います。

4に班員の技術を上げていくことで班員をりっぱなスカウトにしたいことです。

5にどこのスカウトでも仲よくできる班、隊にすることです。

以上のことが主にぼくが班長になったら何をしようということです。

それと、ぼくらスカウトにはちかいとおきてがあり、班長になったらこの二つを必ず守らなければならないと思います。

と、班長になればみんなを指示する力が必要です。しかし今のぼくにはそんな力は少しぐらいしかありません。

今、この班長訓練野営の班員はあまり協力性がなくなってきました。そしてみんなガタガタおこってぼくではおさえきれないと思いましたが、これもひとつの訓練でしょう。ぼくは、この班長訓練野営を通して、いろいろなことを知りました。そしてりっぱな班長になってみせます。

「もし班長になったら」

川隊たつき班 大村 直樹

もし、ぼくが班長になったら、ぼくはどうするだろうか？



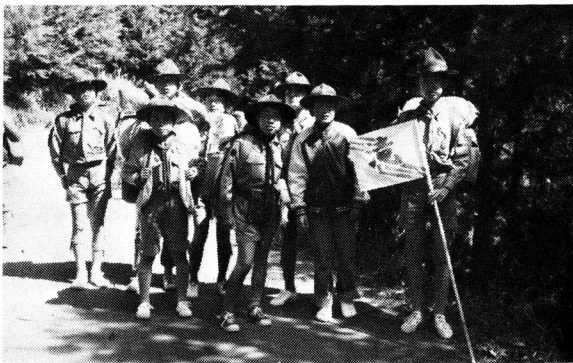
班長になったら

川隊・滝班 島 一 道

ぼくは、この班長訓練野営をやる前には、下級の者をこきつかってやろうと考えていた。それは、ぼくが初級のころに、班長にこきつかわれたからである。だから、ぼくは、下級のものをこきつかうために少し技能を身につけておこうということで、この班長訓練野営に望んだわけである。

しかし、初日の、班長の任務というものを教わって、こきつかうだけが班長ではないと考えた。それによって、ぼくは、人から愛されるような班長になろうと思った。なぜなら人から愛されるようになると、下級の人も、ぼくのいうことをきいてくれるだろう。そして、スカウト活動も楽しくなると考えたからだ。

ここで（川宇連）身につけた知しき、技能をうまくつかって、下級のものをひっぱっていこうと思う。そして、多くの班集會をひらいて、班員と意見をかわし、よりよいスカウト活動をしていこうと思う。（浜松第4団）



班長になったら

川隊・滝班 松島祐治

ぼくは、19団の班長としてこの班長訓練野営に参加している。班長になったら、まずいままでもらった事を忘れず、初級スカウトにおしえたい。

今までに、立ちかまやテント、食たくなどを作ってきたが、長所と短所がそれぞれわかった。

作り方も、やりやすい作り方も学んだ。しかし、19団に帰って、これらのことを実さいにやることはむずかしいが、できるだけガンバッテやりたいと思います。

隊長にいろいろな事を注意されたり、ほめられたりしました。団に帰ってから悪い事は直、よい事はそれ以上にしていきたいものだと思う。

最後に、このキャンプ場は昼間は、すずしく、夜はとても寒く、ねられたものではない。しかし、そのことにたいし、みんなガンバッテやり越えたのはとてもすばらしいことだ。

来年、またこの川宇連にくるスカウトも、この寒さをのり越えてガンバリ、りっぱな班長になることを期待します。

（浜松第19団）

班長になったら

川隊・滝班 細井治虫

もしぼくが班長になったら、班長訓練野営で知った、よい班長になろうと努力をしたいと思っていますが、少しだめのことがあると思います。それは、きょ年、ぼくたちの班の班長や次長が部活などでスカウト活動に参加できなくて、ぼくがよく班長がわりをして3泊4日のキャンプを二回もやらされて、どうもよくないところがたくさんあったからです。でも班長訓練野営で、だいぶくわしいことを覚えたつもりです。国旗の掲揚とこのう、シルバーコンパスのつかいかた、地図の見かた、地図の見かたはぜんぶわかっていただけ、営火のやり方、かまどのつくり方、おぶつ、おすいあなの場所など。ぼくは、このよ



うなことを、いまの小学6年や、こんどカブスカウトからボーイスカウトにあがってくる小学5年に、おしわたかぎり、おしえてあげようとおもうし、おしわたこと以外でも、知ってることはおしえてやるつもりです。でも、おしえてやるだけではだめだと思います。自分でやってみて、どうしてもできなかつたら、おしえてもらう、というのが、いいやりかただと思います。こんど班長や次長、これにならなくとも班長訓練でおしわたことをいかして、スカウト活動をいいものになりたいと思います。がんばります。（浜松第24団）

班長になったら

川隊・滝班 鈴木博貴

ぼくは、班長になったら、まず班員がついてくるような班長になりたい。それには班員が尊敬してくれる班長になりたい。また観音山少年自然の家で話してもらったことを、班員たちに教えて11団だけではなく、ボーイスカウト全体を有名にし発達させる。それには、まず自分のもっている技能を班員におしえる。そして自分が先頭に立ってやるのが大切である。そうすれば班員も班長を尊敬し、信頼し従ってくれることだろう。

そのような班は、ものごとをやる時には、とてもまとまりがよく、みんなが団結してうまくできるだろう。そうすればみんなも、進級もはやくなるし、特修章をたくさんもらえる。そうすればボーイスカウトが発達し、スカウトもたくさんになると思う。だから班長訓練野営で教えてくれたことを、現隊に帰ったら、そのことを団のスカウト全員に、説明してみたいと思います。（浜松第11団）

可美第1団結成10周年 おめでとう

10周年を迎えて

育成会会長 太田 浅一

ボーイスカウト可美第1団が結成されて、今年が10周年となり、真に意義深いことで、心より御祝いを申し上げます。

青少年が善良で有能な公民となり、更に地域社会の発展に寄与出来る人づくりをと思い、ボーイスカウト活動が開始されたのであります。

浜松地区の内田嘉一・山中将司両氏の熱心な御指導のもと、育成会の組織づくりや指導者の養成等が順調にすすみ、桜咲く4月に関係各位の参列を得て、ちかいの式が挙行されたのも、つい昨日のこのように思われます。

今日ここに10周年を迎えるに当り、スカウト、指導者を含め90余名を数えるにいたりました。これも関係各位の御支援の賜と厚く御礼申し上げます。

今後ともスカウト・指導者・育成会会員が心を合わせ、団発展のため努力いたす所存であります。

[10周年記念式典での育成会会長の挨拶より]



10年のうた

団委員長 山中 洋一

| | | | |
|---------------------------------------|--|---|---|
| 心ゆたかで スカウトの輪を 明るい社会 力あわせし | たくましい ひろげつつ 葉かんと ボランティア (42年度) | 榎野ひろがる 浜松地区の そびえる富士の 轟きわたる | 朝霧で 合同野営 いただきに 大歓声 (48年度) |
| 桜花の育に 雨もあがった おきての声も 弥栄びびく | ちかいたて 光のなかに 高らかに 発隊式 (43年度) | 北海道の 源野に生きる かがり火赤く まなざし光る | 大自然 スカウトの てり映えて 日本ジャンボリー (49年度) |
| ボーイ2隊と つづいて発隊 日本ジャンボリー 友情深めた | カブ隊が おめでとう 朝霧で スカウト我ら (45年度) | 権山めざして 移動野営で 青谷、浦川、 集い笑顔に | B.S、S.S 集中登山 瀬尻より 雨しぶく (50年度) |
| 朝霧はれて 試練の嵐 相互理解の 空をゆるがす | 富士の山 のり越えて うた声が 世界ジャンボリー (46年度) | S.S隊は 100 軒歩いて B.S隊は サイクリングで | 奥丹後 天の橋立 走ったぞ 2.3.2 軒 (51年度) |
| スカウト像の 弥栄 県連 我らも越えよ 竜頭山の | 除幕式 50周年 この苦難 雪ふんで (47年度) | 発団10周年 希望に燃える ヒルモントへの スカウティングの | 記念して 海外派遣 道程は 永久の道 (52年度) |

結成式おめでとう 浜松第25団カブ隊

桜花らんまん、スカウトに花をそえるにふさわしい、4月9日(日)、館山寺の北庄内中学校に於て、浜松第25団のカブ隊の結成式が行なわれました。

浜松館山寺ライオンズクラブの奉仕により新しく団が結成されました。このようなケースは当浜松地区でも始めてです。青少年教育にはスカウト教育がいかに大きな力のあるものかを痛感させられます。

カブ隊は12名のスカウトにより発隊しましたが、新入隊員をすぐ12名むかえ24名位になる予定です。

6月頃には続いてボーイ隊の発隊も予定されております。

風光明媚の館山寺地区にスカウトがどんどん増えてゆくのは、ほんとうにうれしいものです。(S・Y 記)

西部ブロック B-P祭

西部小地区コミッショナー 永田 通児

早春とはいえ寒さ厳しい2月26日、浜松市立曳馬小学校で、カブスカウト、ボーイスカウト、リーダー、父兄ら約320人が参加して、盛大に開かれた。

午前9時、校庭に集合。9時10分、松井C.S隊長の司会で、開式。

式典は、浜松第24団B.S隊の国旗掲揚で始まり、君が代と世界の総長斉唱、永田隊長のあいさつ。次いで、浜松地区委員長の内田時世先生、原口B.S隊長のお話があった。隊員一同、目を輝かせながら聞き入り、B-Pの遺志を継いで、立派なスカウトになろう、と誓い合っていた。

式は25分間で終わり、9時40分から第二部に入った。松井C.S、原口B.S両隊長の注意があり、C.Sはドッジボール、B.Sが追跡ハイキングのゲームを楽しんだ。ドッジボールのC.S隊員は、大はしゃぎしながら走り回り、大喜びだった。追跡ハイキングは、曳馬小一四ツ池公園一市青少年の家一曳馬小間6.2キロ間で実施。暗号解読、歩測、友達とは・友情とは一のテーマのデスカッション、ソングコーナーの関所を、日ごろの訓練の成果を発揮しながら通過した。

ゲーム終了後、成績のよかったC.Sの7、11、12団に賞状が贈られ、全員で敢闘とファイトをたたえあい、和気あいあいのうちに、幕を閉じた。

この後、隊員たちに喜んでもらおうと、リーダーや父兄たちが甘酒を用意してプレゼント。寒さの中、はしゃいだ後の一杯は、大好評だった。

[総括] 楽しく、意義深い一日だった。隊員たちの生き生きした表情が忘れられない。これも、関係者の方々のご協力、深いご理解があってこそ、リーダー一同は心から感謝している。

*** スカウトコーナー ***

始めてボーイとキャンプ へ行ったこと

浜松第4団ボーイ隊 武正 芳明

ぼくは4月1日、ボーイとキャンプへ行った。このキャンプは、ぼくの目標だった。りす、うさぎ、しか、くま、そして月の輪。ほとんど出席してがんばったこの3年間。「よくやったなあ」と自分ながら思った。

さて、バスは方広寺に着いた。班は2班だった。ほり君が班長だった。自分は、「最下級生なのだ」ということを頭におかなければ、と思った。

夜のミーティングは、やはりボーイが主役で大声を出していた。「ぼくらもいつか、ああなるんだな」と思った。

次の日は、5時30分起きだった。カブでは、ブツブツ言う者もいたが、ボーイには一人もなかった。「さすがだな」と思った。午後はハイキングへ行った。ボーイは中心となって張りきって行った。

いよいよ帰る時、ぼくは「方広寺にもう少しいたいな」という気より、「たくさん学んだな」という心の方が多かった。

このキャンプを経て、ぼくたちはボーイになった。これから最下級生として力いっぱい生がいのある、くいのないようにやっていきたいと思っています。



楽しかったカブの思い出

浜松第4団カブ隊 赤嶺 壮一

この一年間をふりかえってみて、思えば、いろいろなことがあった。実は、ぼくは、りすの道から、くまの道に入ったので、一年間しかやれなかったが、思い出はたくさんある。

まず、一番心に残っているのは、西気賀へキャンプをしに行ったことと、組長になったことである。

西気賀でのキャンプは、とてもおもしろかった。近くの川でカニをとって見せあいっこをしたり、カニとカニとをけんかさせたりした。

また夜は花火をやった。ロケット花火を二本一ぺんに発射させたり、大型の花火を五、六本まとめて打ち上げたりして、と

てもまぶしかった。

またねる時は、はじめてねぶくろに入ってた。10時ごろに便所に行くと、みんなも、あつくてねられないのか大体の人がついて来た。りした。結局、10時をすぎてもねられなくて次の日起きた時は、ねむたかった。

しかし、一番楽しかったのは、近くの山へハイキングへ行ったことだ。最初は元気だったぼくも1時間、2時間と歩いていくうちに、足はぼうのようになり、こしはいたくなり、ヘトヘトになった。しかし、まだまだ山のちょう上は遠い。半分も行っていないかった。

時おり、山のちょう上みたいな物が見えてくる。元気を出して進んでいくと、ただの岡で、がっかりすることも何度かあった。

がけくずれで、道がない所もあった。そういう所は注意深く一列に、一人ずつ道がくずれていない所から、くずれていない所へとわたって行った。なにしろ下へ5～6メートルはあるほどだ。一つまちがうとほねを折ることは確かだ。ここでは、みんなスリルを味わったかもしれない。

それから何時間ぐらいたったであろう。先頭から「オーイ、ちょう上が見えてきたゾウウ」という声が聞こえてきた。ぼくは急いで走って行って、ちょう上まで一気にかけ登った。そのあと力が急にぬけてしまった。昼ごはんにおにぎりを食べて、遊んでから山をおりた。

帰り、道をまちがえて、ぼくらがとまっていた公民館にたどりついた時は、みんなくたくたになってしまった。

もう一つ心に残っているのは組長になったことだ。組編成の時、多分組長は竹山君だと思っていたのに、隊長から、「組長赤嶺」と指名され、ぼくは、天にも登るような気持ちであった。もううれしくて、うれしくて、隊長の話もまともに聞けないぐらいであった。

あれからもうぼくは、カブを卒業していく。思えば、月日のたつのも早いものだが、カブで経験したことは一生わすれないだろう。また、それを今年からやるボーイに生かしていきたい。

初めてのスキー

浜松第4団カブ隊4組 高柳 禎克

カブスカウトに入団して、初めてスキーに行くことが出来た。出かける前から、もううれしくて、うまくすべれるかどうか、とても心配だった。でも、目的地につき、スキーをつけて隊長たちの正しい指導で、なんとかすべられる様になった。直かつこう、しゃかつこうなど、むずかしい方法も教えてもらって、ころびながらも楽しくすべられる様になった。うれしかった。

ぼくは、カブスカウトに入団して、とても良かったと思う。夏のキャンプ、はんごうすい飯、がいとうで緑の羽根を売ったこと、楽しい思い出が、たくさん出来ました。

この経験したことを、いろいろな面で、活用したいと思う。ぼくには、一年生の弟がいるが、ぜひ入れさせたいと思う。

*** スカウトコーナー ***

雪合戦

浜松第11団カブ隊 小楠元久

2月26日、日曜日の日の雪合戦のこと。

弁当を食べて、山を少しのぼったところで、雪合戦をした。1、4、5組と2、3組でやった。ぼくは1、4、5組の方だ。隊長のふえがなった。ぼくたちは、いっしょうけんめいに走り、たどりついた。相手があった。近くにある雪をまとめてなげたり、かたまっている雪をなげたりした。めいちゅうした。ぼくは1発も当てられなかった。もどるとき、ズボットもぐったりした。ぼくは長ぐつをはいていないので、つめたかった。だれかが2、3組のネックチーフをとった。勝った。思わず、「やったあ。勝ったぞ」と大声でいった。

手は、つめたく、足も、体じゅうが冷たい。うれしくて、ころげまわっておりていった。びしょびしょに洋服がぬれ、体じゅうが氷つくように寒かった。とても寒く、もうこりごりだなあと思った。



治部坂高原へ行って

浜松第11団カブ隊 小笠原康人

黄色いリュックに、着がえと弁当をつめて、バスに乗りこんだ。ボーイとカブと二つに分かれて二台のバスで、治部坂高原のスキー場にむかった。道中4時間の長い道のりだった。遠くに雪が見えた時には、バスの中では「雪が少ないなあ」とか、「すべれるのかなあ」と、つぶやく声が聞えた。

でも、治部坂高原についたときには、むねが「ドッキリ」するほどつもっていた。昼食は、少しおくれたが、隊長の指導にしたがって雪遊びで楽しんだ。せっかく作っていったそりは、残念ながらあまりつかうことができなくて、がっかりした。

「雪は、冷たい。」

「青くなっている人もいる。」

「鼻の頭が真っ赤な人もいる。」

「泣きだしそうな顔をしている人もいる。」

広いほうには、色とりどりのスキー服を着た人たちが気持ちよさそうに、すべっていた。ちょっぴりうらやましかった。

帰りのバスの中は、つかれたせいか、思ったより静かだった。

浜松に着いたのが7時半ごろだった。楽しかったです。

カブ隊と壁新聞

浜松第7団カブ隊々長 北川良雄

新しくカブ隊に入った少年達や、更に経験を積みかさねたスカウト達に対し、この一年間の活動の記録として、三月のテーマ「タイム・マシン」で、壁新聞を作らせてみた。

各組単位で編集され、B判の全紙を使っていろいろな趣向がこらされており、その編集に努力の成果がうかがえるものばかりであった。

そのタイトルがまたさまざまで、一組「ワイワイ新聞」二組「スカウト新聞」三組「おもいで新聞」四組「四組新聞」五組「なかよし」六組「六組5大ニュース」と、各組のスカウトがチエをしぼった題名がつけられており、それぞれ編集責任者をたてて、記事の内容やその割つけに十分格付が加えられ、スカウト達の進取な自主性から生み出された力作となった。ある新聞は、この一年間の行事を五大ニュースとして、次のようにまとめていた。

第1ニュース 7団20周年記念行事

第2ニュース 春野町キャンプ、第3ニュース クリスマス

第4ニュース 阿多古川にて飯盒炊飯、第5ニュース ひるがの高原スキー教室。

また、いろいろな活動のなかで、「緑の羽根」の募集活動に参加したあるスカウトはその感想を次のように書きしるした。

「3月12日、ぼく達は、緑の羽根を売りに駅前の方まで行きました。とても寒い日で最初は全然売れなくて困ってしまいました。1本20円の羽根だけどなかなか買ってもらえませんでした。ぼくは、ここで社会のきびしさ、お金の大切さを知りました。けれども百円とか二百円入れてくれる人や、手足が不自由でも買ってくれる人があり、ぼくは感激しました。11時半までには、全部売り切れました。この日の総売り上げは約5万7千円でした。このお金は、社会に役立つと思います。とっても寒かったけど最後まで、がんばってとてもよかったですと思いました。」

その他、「らく書コーナー」や「クイズコーナー」「スーパーカーコーナー」など、現代っ子、カブ達の時代を敏感に反映した記事が紙面を飾っており、この一年間の結晶を白紙のなかに豊富な色彩を使って描きだしたユニークな絵画の感じさえるものであった。

この一年間をふり返り、カブ隊の指導者としてスカウト達がいろいろな活動や行事のなかで「果して自分のもの」にしていたか、疑問に思うことがあったが、カブ達が作成した、これらの壁新聞をみて、その疑念がたちまちに解消してしまった。新しく入った少年達や段階を積んでいく、カブ達にも、活動のなかで、それぞれイヤなこと、苦しいことにも遭遇することと思うが、皆それらを乗り越えて前進している。

スカウト達の「健全な心身」の成長は、この壁新聞にも活かされており、カブ達の元気な叫び声がきょうも町にそして山に、

*** スカウトコーナー ***

大きく響き渡ろうとしている。

最後に、ボーイスカウト活動の中でもカブの活動については、デンマザーの協力がいかに大切かも知りました。又それぞれの家庭の理解も必要であることを

よボーイスカウトの始まり、しっかりとやらなくてはいけないと思う。

B — P 祭

浜松第7団カブ隊 中条悦孝

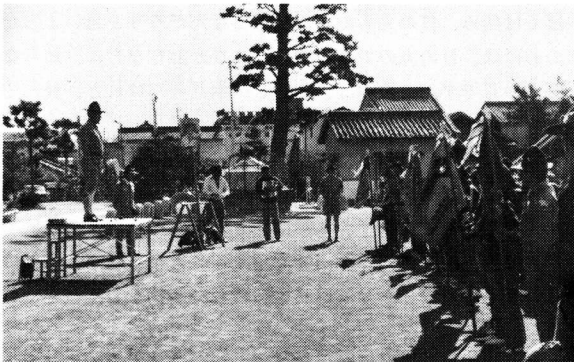
2月26日、ぼく達7団カブスカウトは、B—P祭に参加するため、住吉青少年の家に集合して会場の曳馬小学校まで歩いて行きました。途中で少し道をまちがえたりしましたが、無事につきました。

式が始まり寒くてガタガタしていました。ベーデンパウエルの写真もバタバタしていました。

いろんな方からの話や、「世界の総長」を歌って式は終わりました。

それから、ドッチボール大会がありました。ぼくたちの団は、「くま」の人達がとちゅうでぬけてしまったので心配でしたが、みんなのチーム・ワークが良かったので全勝優勝をすることができました。表彰式の時、ぼくの組が当番なので組長の西野君が先に帰ったので、ぼくが表彰状をいただきに行きました。ボーイの隊長の永田さんからいただきました。

帰りに、青少年の家で、「良くできたね」「でも最後に敬礼すればよかったね」とおっしゃったので、「あーそうだなあ」と思いました。



カブ生活をふり返って

浜松第7団カブ隊くま 長内 明

ぼくは、このカブスカウト生活をふり返ると、いろいろな思い出がある。キャンプのあのうれしかったこと。ハイキングやオリエンテーリングや運動会の楽しかったこと、ゲームに負けてくやしつらかったこと、カブ生活最後のこの時思い出される知識や進歩した矢章などたくさんもらえてよかった。デンマザーの注意も少し聞かなくて、遊んでばかりなどが思い出される。今思うと、その事がくやしと思う。4月からいよいよ

スカウト活動

浜松第12団ボーイ隊 森下直樹

ぼくは昭和52年4月にカブスカウトから、ボーイスカウトに進しました。その日から今日までいろいろなことがありました。トランペットの練習、ハイキング、サイクリング、キャンプなどをやってきました。その中で、いちばん心に残ったのはキャンプです。ぼくは、まだ初級なので、薪ひろい、水くみ、しよつ器洗い、ごみのしまつなどをやりました。初めのころはいやだなあと思っていたのですが、いまは、そんなことは思っていないです。班長に言われた仕事は、やらなければいけないからです。ぼくは、もうじき2級になります。そしたら、もっとスカウトのことを学びたいと思います。

班長訓練野営に行って

浜松第12団ボーイ隊 河合宏紀

3月の23日から26日にかけて、班長訓練野営があった。僕にとっては初めてである。班長訓練野営のグループは、班員がみんながう団になるように編成してあるので、同じグループに僕の知っている子はひとりもいなかった。

だが僕は、こういうグループから本当の団結心が生まれてくるのだと信じて家を出た。

8時の和地山グラウンドは、まだまだ寒かったが、もうほとんどの子が集まっていた。バスに乗って目的地につくと、そこには広大な自然の緑の中に白い建物がひととき鮮やかに目立って建っていた。僕達はこの観音山少年自然の家で1泊し、あくる朝、川宇連の野営場へのハイクに出発した。その頭の中には、昨日リーダー達に聞いた班長の任務や役割などのことがぎっしりつまっていて、野営の意欲に燃えていた。だが、野営場までの道のりは遠く、えんえんと5時間もかかった。だが、到着するとすぐに設営、終り次第夕食の準備、とぎっしりプログラムが詰まっており、1日の予定をこなし終り、テントの中ころがりこむと、すきま風がビュウビュウはிரりこみ、寒さのためなかなか寝つかれなかった。その夜、僕は真夜中に寒くて2度も起きてしまった。

次の日、朝礼がすむと、国旗とその掲揚法、基本動作、野営、地図とコンパスなどのことについて一日中話を聞いたり実際に行ったりした。夜、営火の時に、もう一度頭の中をふり返してみると、一応はおさまっているという感じだった。だから、その夜、寝袋の中でもう一度整理をし直してから朝まで深い眠りにおちた。明日、予定を全部こなし後、「人を指導するには、まず自分が先に立ってやることだ」と僕は川宇連からだんだん離れていくバスの中で自分の心に言い聞かせていた。

**** スカウトコーナー ****

「日の丸物語」を読んで

浜松第12団カブ隊 6組 坂田 成司

「日の丸はもとから日本の国旗だ」と思っていたが実は違っていたのだ。日本の印という意味は同じだが、『総船印』だったとは、少しも知らなかった。又、これまでは、明治維新と同じに日の丸が出来たと思っていたが、1853年から、日の丸の関発が始まっていたとはおどろいた。国旗は、昔、鎖国をしていた日本にはいらなかったが、なぜ鎖国をしていたのか、と不思議に思ったりする。鎖国をしたら、外国の文化がわからないし、万が一外国が攻撃してきたら、勝っても負けても日本の国旗がないと、その威力を示すことが出来ない。だから、鎖国をしても、日本の国旗があって、あたり前だと思う。

もっとおどろいたのは、昭和20年8月15日から、日本人は、自由に自分の国の国旗をあげることが出来ないということだ。現在は、何かの集会や、祝祭日に国旗をあげるのがふつうなのに、絶体にあげてはならないとはおどろきだ。ここは、日本の土地なんだから、別に国旗をあげてもいいと思う。しかし、戦争に負けてしまったので、日本はアメリカの領土になってしまったかもしれない。そう考えると、日の丸はあげてはならないことになる。しかし、まだ完全にアメリカに国を取られていないのだから、日本人は、日本の国を渡さないという心を、日の丸を通じてアメリカにわかってもらいたかっただろうと思う

そして、昭和24年1月6日に日の丸のけいようは無制限にあげてもよくなった。これは、これまでの日本人の努力のかたまりだと思う。日本人は国旗とは、政府の役人が国民の意見もきかずに、勝手に決めてしまったものだと思っている人が多いのではないだろうか？しかし実際には、多くの人の真心が通っているのだ。これからは、もっと日の丸を大事にし、らんぼうにあつかわないように注意しようと思う。

日の丸ものがたりを読んで

浜松第12団カブ隊 笠原 典彦

日の丸の旗は日本の国旗です。ボーイスカウトなどでよく使われている旗です。この旗はいつごろから国旗になったか、この本を読んで初めて知りました。

国旗は日本という名にあったような日の丸は世界の国旗でもまとまっているものは少ないのです。

みじかにみている日の丸の旗のデザインは、外国人がデザインを売ってくれたのむほど、とっもかっこうがいいデザインでした。ぼくもみてほかの国より白と赤の二色の旗がほとんどに外国人がほしがっただけの、かっこうよきはあるなと思います。

日の丸を総船印とすると、自分の家の紋が日の丸にた丸の中に、たかの羽をこうさしたのものや、黒丸のようなものは自分

の役を利用して、自分の家の紋を日本の印にしたとかもうわさが広まったこともあったのです。

ぼくはやっぱり自分の家の紋がそんなに国の印に似ている方がいいのかなと思います。でもやっぱり国旗は、日の丸にきまりましたこの物語を読んでいながら、よかったなと思いました。

日本という国の名にあった国旗の方がかっこうもよいし、しっかりしているからです。

国旗を見るときは、ただ見るだけではなく、いっそう深く中を考え見ることにしようと、ぼくは思います。



日の丸ものがたりをよんで

浜松第12団カブ隊 白石 則夫

ぼくは始め、日の丸ものがたりってなんだろうと思いました。そのわけは、日の丸のでき事や、うつりかわりなどは、知らなかったからです。この本は、くわしい本だったけれど、読んでいるうちにしだいにわかってきました。

この本にのっている事は、江戸時代（徳川時代）から昭和20年までのことです。

黒船4そうが浦賀に来て、江戸は大きわぎ。ペリーとの条約で日本人は、下田、長崎、函館を開港することにしたが、締結は結ばれなかったが、ペリーは日本に新しい贈物をおくってくれた。

また、昭和になって戦争で負けたので、許可をなくてはあげられなくなったのだ。ぼくは、この本を読んで心に強く感じたことは、勝りん太郎が太平洋をわたる時、「見ろーっあのマストにひるがえる日本の旗を!!」と、いった時ことに、やっぱり昔の人は強いんだなと思いました。

それから、日本が戦争で負けて日本の旗があげられなくなってしまうようになる時、ぼくはくやしく思いました。

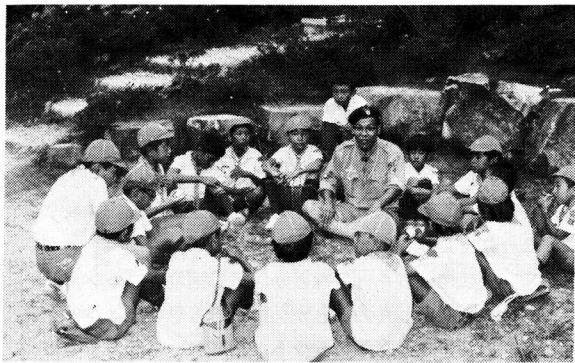
日の丸の旗の赤い丸は太陽を表わしていますが、ぼくは、世界の国々の旗とくらべて、すっきりしているし、「日本」という名前にふさわしい旗だと思います。

*** スカウトコーナー ***

マラソン大会

浜松第19団カブ隊 松尾 明

1月28日に和地小学校近くの田んぼの道でマラソン大会をしたコースは和地文具の所を通過して一番始めの曲がり角で曲がりのはしの所を通過して、坂を上がる。それを2周はした。始めにくまの人からはした。ぼくたちの組長はおくれてスタートしたのでびりになってしまった。くまの人たちがとても苦しそうな顔をしてはしっていたので(そんなに苦しいのかな)とびっくりした。いよいよぼくたちのスタートだ。隊長の「よういドン」という声でいっせいにスタートした。始めの1周目は2位で走っていたが時々足がグキッとくじいたりした。田んぼ道だからだ。2周目になると、顔が真っ赤になってしまって苦しくなってきた。3位だ。息が「ハーハー」とすごく苦しくなってきた。足がもつれてきて体があつくなってきた。でも力いっぱいはいした。と中になって力がついて、石原君にぬかれてしまって4位になった。そのままはして4位になってしまった。3位には入賞しなかったけど、おもしろいのでくいはなかった。「へえ、つかれたなあ」。来年もまたがんばろうと思った。とてもいい思い出になった。



キャンプの思い出

浜松第19団カブ隊 塩沢 一修

去年の夏のキャンプの日、ほうらいじ山に行きました。前日はおかしを買って心がはずんでキャンプのしたくをしました。キャンプファイヤーをしたり、ゲームをしたり、おかしを食べたりとても楽しい日でした。山に行ったらマムシがいたときはとてもこわかったけれど、にげてからは、みんなであらいました。はく物館の中のまむしはとても大きくて長かったです。川で水あそびをしてさわがにをとってにがしてやった時、さわがにが、深いところにおちたので、ひろってあげて石のかげに入れてやりました。きもだめしの時、はじめは人の前では、「こわくなんかないよう」と言っていたけど、いざとなるとこわくなりました。帰る日になるとつまらなくなりました。とても楽しいキャンプでした。またいきたいと思います。

つり大会

浜松第19団カブ隊 古橋 政幸

3月26日佐鳴湖で、魚つり大会をしました。朝公園に集合でぼくが行くともうみんなならんでいました。たい長のあいさつ、今日の行事のお話がありました。エフをたい員みんなにわたして「住所と名前をかけ」といいました。カブ隊に入って始めての魚つり大会です。「魚がつれるといいなあ」と思いました。ぼくたちのデンマザーは野中さんで「2組の人たちつれるかな、がんばろうね」とはげましてくれ、みんなは魚をつる用意をし、つり始めましたが、待っても糸を引くようすがなくてなかなかつれません。「つまらないなあ」といいました。野中さんは「古橋君どう、がんばろうみんなもどうかな、一匹でいいからつれるといいね」といいました。そのうちに係のおじさんが来て「受けつけてありますか」といってエフのすみを少しきっていってくれました。「がんばってつって下さいよ」おじさんが、はげましてくれたので、べんとうを急いで食べて又つりました。でもやっぱりだめでした。集合の時にぼくたちの仲間で三びきつった子がいました。その子はすてきだと思えました。ぼくはざんねんながら魚をつることはできませんでした。でも始めていけんした魚つり大会は楽しい一日でした。



班長訓練野営

浜松第19団少年隊 松島 祐治

3月23日から26日まで川字連のキャンプ場で班長になるための訓練を受けました。

とても厳しく、とてもつらかった。しかし、班員に励まされたりして、ついに訓練を終えました。

4月からは、班長となり素晴らしい班を築くつもりです。この班長訓練野営は、とてもいい思い出になることだと思います。

このスカウト活動をカブスカウトの時から行ってきましたが、こんなすばらしいものだとは思ってもみませんでした。

これからもスカウト活動に励み素晴らしい思い出を作りたいと思います。

*** スカウトコーナー ***



第13期班長訓練野営

浜松第19団少年隊 小粥和彦

ぼくたち19団から、第13期班長訓練野営に行った仲間は4人いました。ぼくたちは、川隊の中の鮎(アユ)班にはいり、この3泊4日をすごすことになりました。

3月23日の朝、8時半に観音山少年自然の家に向かった。バスの中では心配と喜びでへんな気持ちだった。開所式が終わるとすぐに班長の任務について学んだ。なんとなく時間だけがうごいているようだ。昼食をすませてから1時から4時までほとんど部屋にとじこもって班について学んだ。4時半から夕べのつどい、6時から9時ごろまで明日のハイクのことなど話し合った。ぼくはこの日ほど、きりつ正しい生活を送ったのは始めてだと思うぐらいだ。次の日の朝、3泊4日分の荷物をしょって10kmのハイクに出発した。山あり谷ありの連続だった。もし班長野営で苦しかったことと聞かれたら、まっ先に10kmハイクと答えるだろう

野営地に到着したらすぐに設営だ。夕食は、かまどがへただったのでちょっとくろうした。でも野営地で食べる食事のうまいこと、言葉には表わせないほどだ。ねているときは、ひえこみ、もうごえてしまうほどだった。このときほどふとんがどれほど人の心をあたためてくれるかがわかった。

3月26日閉所式には、一人一人の名前をよみ上げられ一人一人が川宇連にひびきわたるほどの声でへんじをした。「解散」川隊の隊長が言ったとたんにきゅうにいままでのつかれが出てきたようだった。

班長訓練野営の思い出

浜松第19団少年隊 古橋孝春

班長訓練野営でいちばん苦しかったことは移動ハイクだった。9時にハイク出発だった。まず最初の目的地は久留女木小学校だ。そこまでの距離は約3.5km。そこで、昼飯をもらう予定だったが時間の関係でもう少し歩かなければならなかった。リュックサックは重いし坂道は、あんがい急斜面なので、さすがに

つかれた。昼飯は、山道を登って人家の近い場所で食べた。腹がすいていたのでとてもおいしかった。昼飯が終わると、スケッチだった。ぼくは、山のスケッチをした。急いで書いたのでくしゃくしゃになってしまった。スケッチが終わると、方位角をやり最終目的地川宇連に急いだ。

しばらくいくと12団の小粥隊長がいて

「もやい結びをやれ」とみんなに言った。ぼく達は、隊長にみせて再出発した。みんなで

「あと5、6km」と言いながらはげまし合い助け合いながら川宇連めざしてがんばった。

ぼく達の班がついた時は、ほかの班の人達は、ところどころにすわっていた。短かいようで長かった班長訓練野営。この野営で学んだことをいかしてよい班長になるように努力したいです。

スカウト活動

浜松第19団SS隊 渥美博久

僕はスカウト活動をはじめて、今年で八年ぐらいになるだろうか。

最初はカブスカウト、次にボーイスカウト、そしてシニアスカウト、というように進級して来たが、これらのスカウト活動は僕にとっては、すばらしい思い出の場であり、また、きびしい訓練の場でもあった。僕にとってのすばらしい思い出としては、まず最初にカブスカウトの入隊式がある。僕はこの入隊式のとき、ともかくカブスカウトであるということを胸に恥じないような行動をしようと思った。

そして、浜松地区スキー訓練とか、第13回世界ジャンボリーに行って外人と握手したこととか、ほかにも思い出はたくさんあるが、この長年にわたるスカウト活動において得たものは、これらの思い出よりも、はるかにすばらしいものであり、今後自分のためにいかされる重要なものだと思う。

だから僕は、今まで自分が先輩たちをみならって活動してきたように、僕をみならう後輩たちのためにも、より、りっぱなスカウトに、またより、りっぱな社会人になろうと思っている。

は ぜ つ り

浜松第24団カブ隊 松本和寿

10月2日の隊集会にはぜつりに行きました。

ぼくのはじめについた魚は小さなはぜだったけど、二度目は大きいはぜがつれた。三度目はお父さんとどちらが大きいのがつかれるかやってみました。あげてみると、お父さんのさおには草がかかっていて、ぼくのさおには小さいぼらがかかっていました。それから何かいもやっているうちに、のどがかわいたので、さめたお茶をのんで、またやってみました。

**** スカウトコーナー ****

さおをあげてみると、お父さんのさおには10cmぐらいのはぜがかかっている、ぼくのさおには11cmぐらいのぼらがかかっていました。

家に帰ってからお父さんは「こりゃアかずに負けたわ」と言いました。ぼくは、ついでにお父さんに勝ったのは、はじめてでした。



カブスカウトの集会

浜松第24団4組 鈴木平信

ぼくはカブスカウトの集会が大好きです。いろいろな事を学んだり、行った事もない所へつれていってくれるからです。

カブでいろいろな所へ行つたけど、なかでも一番印象に残っているのは、カブだけの運動会です。いろいろな衣しょうをきておどったりします。次はパン食い競走です。

「バーン」

ピストルがなりました。ぼくは、むがむちゅうで走つた。パンは目の前、パンの袋を歯でかんだ。顔をぎゃくの方向に向けて思っきり引っぱつた。

「ピリッ」

思っきり引っぱりすぎてパンが袋をやぶつて出ていってしまった。お母さんたちが口を開けてわらつた。なんとなくはずかしくなつて空を見あげた。くもも、にっこりわらつているようだった。

「ジェンカをやるぞ」と言つたので、みんなジェンカをおどりました。

「ポツン ポツン」と手や顔に雨が落ちました。

「ドザー」

雨がはげしくふりだしました。またたく間に地面に水たまりができました。みんなは隊長さんたちのいるテントの中に入って雨がやむまでテントの中でまぢました。いくらまっても雨がやまないの、運動会を中止しました。そして家へ帰つて、ぼくはこう思いました。

「雨がふらなければその何倍も楽しかつただろうなァ」
何度もため息をつきました。
ある秋の日曜日のことでした。

思い出

浜松第24団少年隊 加茂能直

今まで、カブスカウトを、やってきて、いろいろかぞえきれないほど、たくさんの思い出があり、その中には楽しい事、苦しかった事がありました。一番初めに、24団を入隊するちかい式がありました。ぼくは、しっかり言えるかなと思つて、少し心配でしたが、他の人のちかいを見ていると、かんたんなやうな気がして心配という気持ちもうすれてきました。ぼくの出番が来ました。どもらないで、しっかり言えました。他に夏休みの終わりに、2泊3日の舎営がありました。楽しかつたけど、いやな時もありました。それはオリエンテーリングです。歩数なんかがあわなくて、うまくいかなかつたり、へんな道に入つていたりしました。でも楽しかつた事では、キャンプファイヤー、いろいろなゲームもやりました。この時は、とても楽しかつたです。まだまだいろいろな思い出がありますが、思い出は、ボーイスカウトになつてもまだまだ続きます。カブスカウトで、やつた事をボーイでもいかししたいと思います。



思い出に残つたこと

浜松24団ボーイ隊ホワイト・ウルフ班 鈴木智之

ぼくは、ボーイ活動の中で、いろいろなことを教えられました。スカウトのちかいのことばの中に、スカウトは誠実である、忠節をつくす、人の力になる、友誼に厚い、礼義正しい、親切である、従順である、快活である、質素である、勇敢である、純潔である、つつしみ深い、というおきてに少しでも近づくように努力している。隊長は、きびしい中にもやさしさがあり親切でたいへんいい人です。キャンプ生活にも慣れてきました。テント張り、すいじ、など初めのころよりうまくできるようになりました。

級も、初級、二級、一級ハイクをおえついに一級になりました。一級ハイクは、重いリュックをしょつて歩いたのでとてもつかれました。いろいろな課題をやりとげたときの喜びはまだ忘れられません。今は、菊スカウトになるように努力しています。特修章も11個もとれてうれしかつた。苦しく、つらいこと

もあったが、みんなともなかよくできて楽しい一年だった。これからみんなともなかよく協力しあい、いろいろなことをやっ
ていこうと思います。

ボーイスカウトの反省

浜松第24団ボーイ隊 加藤真治

ボーイスカウトに入って、僕は、思ったよりきびしく、思っ
たよりやさしいなあと思った。

まず、思ったよりきびしいということは、カブスカウトとち
がって、テントをはり、食事を作り、時間内にピシッ、ピシッ
とした。1日1日の生活などです。

次に思ったよりやさしいということは、ボーイスカウトに入
っている先ばいが、もしぼくたちが、まちがったことなどをし
ていると、「○○君そこは、そうじゃあないんだよ、こういう
ふうにやればいいんだよ」とやさしく教えてくれる。他の団な
らば、ぼくはこんなふうになっていると思う。「コラッ!○○
なにをやっているんだ。おまえ!それでも、ボーイやってんのか」

ぼくは、ほんとうに24団にいせきしてきてよかったと思う。
隊長の原口さん、副長の市川さん、班長の戸塚先ばい、次長の
野島先ばい。そのほか、いろいろなリーダー、先ばい方、ぼく
はこのような人々のおかげで、今までボーイスカウトとして、
いっしょうけんめいがんばってきました。

中学に入学しても部活とボーイスカウトをりょうりつして、
今まで以上にがんばって行きたいと思います。

一年をふりかえって

浜松24団B S 隊ホワイトウルフ班長 市川一人

この一年間、ぼくはホワイトウルフ班の班長を努めてきた。

ぼくは、少々かかってが強く、がんこなのでみんなに迷惑をか
けたかもしれないが、みんな、何も言わずについてきてくれた

ぼくは、西部ブロックキャンポリーで敗血症という病気にか
かった。原因は、キャンポリーの数日前、部活で新しくつを
はいたために、くつづれをし、キャンポリーの最中にばい菌が
入ったのだ。ぼくは、その病気のために、キャンポリーの後の
学校キャンプも参加できなかつたし、8月下旬の宮川キャンプ
もおくれて参加した。12月の一級ハイカムも、ぼくのちょっとし
たミスでみんなを、何倍も長く歩かせてしまった。

ソフトボール大会は、おしくも3位におわった。

その中でも、やはり宮川キャンプが一番心にのこった。ぼく
にとってホワイトウルフ班の班員として最後のキャンプだ。

気田川で泳いだ。ソフトボールをした。ハイカムをした。歌を
作った。営火をやった。パンを焼いた。やけどをした。どれを
とっても最高だった。

この一年間、みんなはこのドジでガンコな班長に不平ひとつ
言わずについてきてくれた。これがぼくにとって最高の思い出
になると思う。

市社会教育施設ニュース

① 青少年の家（住吉）のホール建設

昭和53年度社会教育事業計画の中に発表さる。現在の食堂の東
側に 250名収容の多目的ホールを今年度中に建設し、来年4月
より使用可能との事、期待すべきことである。

② 西部公民館、篠原公民館 完成。次いで曳馬公民館、神
久呂、都田、積志、入野と続々と設置されます。

③ 野外活動センター研究費が予算化され、益々明るい市政
の展望を見る。

西部公民館使用料

| | 午 前 9時→12時 | 午 後 13時→17時 | 夜 17時30分→21時 | 一 日 9時→21時 |
|-------|---------------|----------------|-----------------|---------------|
| ホ ー ル | 400円 | 800円 | 1,300円 | 2,000円 |
| 和 室 | 250 | 300 | 400 | 800 |
| 講 座 室 | 150 | 250 | 350 | 500 |
| 会 議 室 | 120 | 200 | 250 | 400 |

うごき

53年

- 1月10日 スカウト浜松編集会議（法林寺）
- 18日 中央小地区リーダー会（法林寺）
- 20日 地区SSリーダー会（市川事務所）
- 23日 地区コミ会議（法林寺）
- 2月4～5日 中央小地区リーダー研修会（青少年の家）
- 7日 地区委員会（八幡閣）
- 14日 班長訓練野営隊長会議（法林寺）
- 15日 中央小地区リーダー会（法林寺）
- 17日 地区SSリーダー会（市川事務所）
- 3月3日 財政委員会（法林寺）
- 4日 班長訓練野営下見（渋川・川宇連）
- 7日 野営行事委員会（法林寺）
- 10日 組織拡張委員会〔西部小地区〕（法林寺）
- 12日 登録事務（法林寺）
- 13日 地区SSリーダー会（市川事務所）
- 19日 浜松第25団CS隊・隊審査（館山寺公民館）
- 23～26日 13期班長訓練野営（渋川・川宇連）
- 25～28日 県連第7回SSアドベンチャーキャンプ
- 4月2日 可美1団10周年記念
- 9日 浜松第25団結成式

発 行 所 第71号

日本ボーイスカウト浜松地区事務所
 浜松市利町70-4 児童会館内
 編集発行責任者 山中将司
 印刷所 (株)朝日堂印刷所
 昭和53年4月25日発行